

連載

## フィールド・アイ Field Eye

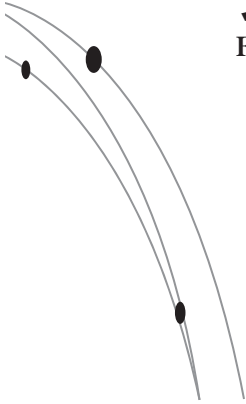
アムステルダムから——③

アムステルダム自由大学  
ヤン R. マグナス

Jan R. Magnus

(訳) 大阪大学 生藤 昌子

Masako Ikefuji



### 採用、テニユア、昇進に関して

スレイブ・マーケット (the slave market)

新米の博士号取得者は職場を見つけなければならない。もし、アカデミアでの仕事をしたいなら、大抵彼らはアメリカ経済学会 (ASSA) の1月初旬にアメリカで開催される年次学会 (“スレイブ・マーケット”とも呼ばれる) に参加する。候補者たちは履歴書と推薦状を複数の (通常、数多くの) 学部へ送る。各学部の選考委員は1次選考を行うが、典型的な経済学部はテニユア・トラックの助教のポジションに対して約1000の申請を受け取るので、選考は大変な業務である。

もし採用ポジションが3つなら、選考委員はアメリカでの面接を約30~40人の候補者に対して行う。したがって候補者全員と世界中のほとんどの経済学部の代表者がアメリカの1つの町に集結することとなる。少なくともこれはコロナ禍以前のことであるが、たとえ次回 (2023年1月) のニューオーリンズでの会議がオンラインだけであっても、今後はおそらくコロナ禍以前のようになるだろう。面接はホテルの10人程度の大きさの部屋で行われ、1つのホテルに多数の学部が面接を同時に行う。面接は25分間で、我々は各面接の直後に審査を行った。

すべての候補者への面接後、約30~40人の中から8人か10人をフライ・アウト (fly-out 大学訪問) に選ぶ。選ばれた候補者は1日かかりの面接のためにキャンパス訪問する。そして選考委員はポジションを提示、または提示しない。このシステムはアメリカ市場のために設立されたが、今ではグローバル市場に

なっている。たとえヨーロッパの博士号をもつ候補者がヨーロッパでポジションを探していたとしてもアメリカの市場に参加する。現在はヨーロッパにも同じようなシステムがある。

私はこの選考プロセスに何年もかかわってきて審査過程で常に記録をしていたので、1次審査 (履歴書と推薦状だけ)、2次審査 (面接)、そして3次審査 (キャンパス訪問) での審査委員の意見がどのようなものか、各候補者に対して委員がどの程度同意していたかがわかる。この記録から2点言えることがある。まず、各候補者の審査において委員間で驚くほどの、私が予想する以上の一致があることだ。次に、審査の各段階の相関が非常に大きいことである。第1次審査で選んだ候補者の上位10人のうち通常9人をフライ・アウトに選んでいた。これは私にとって驚きであった。履歴書と推薦状を読んだ後の面接から追加的に得る情報はそれほど多くないことが明らかである。

研究者のランク付け (Ranking academics)

若い研究者はテニユア・トラックのポジションを得るとすぐ、テニユア取得の必須要件を心配し始める。これらの必須要件は一般的には出版物で採点されたポイントに基づいているが、常にそうであったわけではない。オランダでこのポイントが導入されたのは1980年で、オランダの有名な経済学雑誌に私の同僚グループの2人の経済学者が匿名で公表したことから始まった。彼らは過去5年間の出版物に基づいて上位40人のオランダの経済学者のランキングをまとめた。この発表は大騒動を引き起こした。なぜなら数多くの経済学教授のうちリストに名前があったのはわずかで、私の同僚グループの4~5人の若い研究者全員が上位10人にランクされていることが明らかになったからである。数年後、出版物ではなく引用数に基づいた第2回目のリストが発表された。

それ以来、出版物と引用数のそれぞれに基づいた両方のリストが毎年公表された。他のヨーロッパ諸国も続いてリストを発表し、これらのリストは当初、正の効果をもたらした。つまり、科学的な経済学雑誌の出版物は完全にアメリカとイギリスに優位を占められ、ヨーロッパは科学の最前線では何の役割も果たしていないことを明白にしたのだ。この状況は今では大きく変わったが、最初のリストの公表はこの変遷に重要な役割を果たした。

### 集計だけでは不十分

最近ではそれぞれが重要視する点や集計システムを持つ数多くのランキング・リストが存在し、影響力を持つようになってきた。ヨーロッパの多くの（多分ほとんどの）大学がある特定のリストに基づき各出版物にポイントをつけ、テニユアあるいは昇進の判断のためには最小限の得点が必要であるというガイドラインを持っている。これらの目標得点は一般には昇進・テニユア委員会のためのガイドラインであるが、不文律となっている大学もある。

昇進・テニユアの判断にこの得点は良い面もある。例えば委員会が持つかもしれない縁故主義、偏見、性差別などを防ぐ。今や定量的なルールがあるため、委員がお気に入りの学生にテニユアを与えるのはより困難になった。この点は良いことだ。しかし、機械的な集計には多くの否定的な面もある。第一に、委員会のメンバーは往々にして得点を数え上げることで十分な情報が得られると考えがちだ。彼らは実際にわざわざ候補者の論文を読んで自分自身の意見をまとめることをしない。これは良くないことだ。第二に、この定量的な情報の実際の価値は何か？ トップジャーナルと認められた出版は候補者の学術的な将来性について肯定的なシグナルだと考えるかも知れない。しかし、これはとても疑問だ。トップジャーナルでの出版がその分野での重要な貢献となる保証はない。

### テニユアと昇進についての決定

では、どのようにしてテニユアと昇進の候補者の適性を判断すべきだろうか？

テニユアと昇進の決定が学部の将来に対して行う唯一の最重要決定であることに、すべての学部が気付いているとは限らないようだ。結局は人が学部を作るのである。数字についての議論は少なく、候補者についての意見をもっと議論すべきだ。出版に基づいたポイントが示す情報に比べ個々の意見は曖昧だが、結局、これがより重要なのだ。もちろん、トップジャーナルでの出版が全く無意味であるとか重要でないということではない。私はただ定量的な情報に多くの誤りや短所があることを強調したいだけである。

### 赤池弘次 (Hirotsugu Akaike)

ヒロツグ・アカイケ教授 (1927-2009) は日本の最

も著名な統計学者の1人で、加えて、とても人柄の良い好感の持てる人物であった。アカイケが1992年に65歳を迎えた時、彼の榮譽をたたえて日本とアメリカでワークショップが開催された。私はテネシー州のノックスビルで行われたワークショップでの論文報告を依頼された。ある夜、私たちはノックスビルから約1時間半離れたレストランまでバスで連れて行かれ、私はバスの中で偶然アカイケの隣に座った。私は専門的なことについて話したいと思わなかったが、とても知りたいと思っていることがあったので彼に尋ねた。「アカイケ教授、もし間違っていなければ、日本では若い研究者はアメリカやヨーロッパとは異なり6~7年経てば、ほぼ直ちにテニユアを獲得します。だから彼らの能力を評価する時間は非常に少ないです。では、あなたが所長を務める統計推理研究所がどうやって統計学で一流の研究センターの1つとしてのポジションを維持することが可能なのでしょうか？」

アカイケはこの質問に次のような見事な答えをくれた。「研究所を家族のように考えなければならない。例えば、家族のあるメンバーは統計理論に得意であり、あるメンバーは応用が得意で、他のメンバーは良いコミュニケーション能力を持っているだろう。どのメンバーもそれぞれの強みがあり、そして彼らはみんな家族のメンバーである。彼らが活躍でき、彼らが強みを伸ばし、そして彼らが持てる能力を最大限に発揮できるよう手伝うことが所長としての私の役目です。」

私はこの答えに感銘を受けた。アカイケは研究所のメンバーをポイント生成者ではなく、個人として見ていた。彼は自分の仕事が研究所のポイントを最大化するのではなく、個々の潜在能力を実現させることであると考えていた。これはテニユア、昇進そしてキャリアアップについて、現在、基準となっているものとはかなり異なった見識である。しかし、現在の標準的な見方がアカイケの、このより人間らしい見方よりうまくいくと立証されてはいない。

ヤン・R・マグナス アムステルダム自由大学客員教授。  
最近の主な著書は *Introduction to the Theory of Econometrics*, 6th edition, VU University Press, Amsterdam (2021)。計量経済学専攻。  
いけふじ・まさこ 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授。マクロ経済学・環境経済学専攻。